

『五輪書』研究の序章

An Introduction to the Study of “Gorin-no-sho”

土屋 博映

Hiroei TSUCHIYA

要旨

剣豪としてあまりにも有名な宮本武蔵の実際の人物像については、本書に記されていることくらいしか知りえない。宮本武蔵がその名前を天下に知らしめたのは、吉川英治の『宮本武蔵』からである。大衆文学作品として、出色の出来栄である。それはそれでよい。大いに評価に値する。しかし、実際の武蔵はどうだったかという、歴史的・実証的な立場から言えば、世間を惑わせたとも言えなくはない。本稿では、『五輪書』のどこがどのように、日本人の精神に影響を与えたのか、あるいはそうでないのか、それを明確にすることを目標として、『五輪書』に対峙してみたい。本稿はその手始めとして、『五輪書』の構成を記述することを主とする。

一、はじめに

『五輪書』は、剣豪宮本武蔵が表した、「武道」（仮にこう呼んでおく）の書である。

本稿でテキストとするのは、『五輪書』（岩波文庫・高柳光寿校訂）である。

解題冒頭には次のように記されている。

「『五輪書』は宮本武蔵の著である。武蔵の伝は甚だ詳でない。確実なことは、彼がこの『五輪書』の中でいっていることだけといってよ。」

とあるごとく、剣豪としてあまりにも有名な宮本武蔵の人物像については、この書に記されていることくらいしか知りえない。

宮本武蔵がその名前を天下に知らしめたのは、吉川英治の『宮本武蔵』からである。吉川英治もそれなりに武蔵に関わる過去の文献を調査したのだろうが、あの大著『宮本武蔵』の大部分は吉川の創作である。つまり、「吉川武蔵」と呼んでよい。

大衆文学作品として、出色の出来栄え、それはそれでよい。大いに評価に値する。しかし、実際の武蔵はどうだったかという、歴史的・実証的な立場から言えば、世間を惑わせたとも言えなくもない。

先に、『五輪書』は、「武道」の書であると言ったが、日本人の精神構造に深く関わっているのが、「武士道」である、とすれば、『五輪書』は思想の書と考えてもおかしくはない。

『五輪書』のどこがどのように、思想として日本人の精神に刻まれたのか、あるいはそうでないのか、それを明確にすることを目標として、『五輪書』に対峙してみたい。本稿はその手始めとして、本稿では、『五輪書』の構成を記述することにする。

二、構成

テキスト解題には、次のように記されている。

「『五輪書』は、武蔵がそのいわゆる兵法を伝説の地水火風空の五大に託つて五巻に著したのでかく称するのである。第一地の巻に於いては、兵法の道の大体、二天一流の見立、大きなところより小きところを知り、浅きより深きに至るといっている通り、その流儀を二刀と名づくるに至つた理由、兵法を修むる心掛けの次第等をかなり詳細に互つて述べている。而して第二水の巻は、二天一流の太刀筋を述べたものである。即ちいわゆる身なりのこと、目の付けよう、太刀の持ちよう、足つかいのこと、五方の構えのこと、太刀の道とということ、五つのおもての次第、構えあつて構えなしということ、拍子のこと、打ちのこと、あたりのこと、受けのこと、位のこと

等々、その流儀の奥義を具体的に記したもので、全巻の中心を成すものである。ついで第三火の巻きは、勝負のことを書き著すといっているが、この巻では場の次第のこと、先のこと、景気を知ること等々、太刀そのものの用法の外に、智力を用いて或は敵状を知り、或は牽制を行い、或は変化に出ること等、多分に心理的な働作について述べたもので、水の巻につく重要な部分である。また第四風の巻は、他流の兵法について記したもので、他流と己が流とを比較し、その利失を論じている。而して最後の第五空の巻は、その著述に結末らしきものを付けたに過ぎない。」

この解題により、次のようなことが知られる。

- ① 本書は「地水火風空」（仏説の五大）の五巻に分けられている。
- ② そこで『五輪書』と呼ぶ。
- ③ 第一「地の巻」では「兵法」の大体を述べる。いわば入門編。（※6頁〜23頁、総計17頁）
- ④ 第二「水の巻」では「二点一流の太刀筋」を述べる。全巻の中心をなす。（※26頁〜46頁、総計21頁）
- ⑤ 第三「火の巻」では「智力」を用い、心理的な動作を述べる。二番目に重要。（※48頁〜68頁、総計21頁）
- ⑥ 第四「風の巻」では「他流の兵法」を記す。他流との比較（批判）。

（※70頁〜83頁、総計14頁）

⑦ 第五「空の巻」ではまさに「空」を記す。結末とする。

（※86頁〜87頁、総計2頁）

といったことがわかるのである。なお（※）は各巻のテキストの所在頁と頁総数である。

これによると、水の巻と火の巻の分量がもつとも多く、以下、地の巻、風の巻、空の巻と続く、とくに空の巻の2頁の少なさには注目される。なお、空の巻を除き、各巻とも冒頭に、序文とも見られる1頁ほどの文と、巻末に、まとめ（結論）とも見られる1頁ほどの文が添えられている。

三、本文

1、地の巻

地の巻は、冒頭が、「兵法の道、二天一流と号し、数年鍛錬の事、初而書物にあらわさんと思、時寛永二十年十月上旬の比、」（16行）というこゝとで始まる。実は、各巻には冒頭序文が存在することについては、既のべたが、本巻のみ、全体の序文とも言われる文言がまず記される。ここでは、「武道」ではなくて「兵法」という表現を用いていることに注意したい。次に、「万事において我に師匠なし」という表現から、彼の「兵法」は自己の体験から身につけたものだということになる。さらにま

とめの部分で「天道と観世音を鏡として、十月十日之夜寅の一てんに筆をとつて書初るもの也」と記される点が注目される。「五輪書」はその題名通り、宗教的な姿勢をもって著されたものと言つてよい。

次に、地の巻の序文(15行)が記される。重要と思われる部分を抜粋する。冒頭には、「夫兵法と云事、武家の法なり、將たるものは、とりわき此法をおこなひ、卒たるものも此道を知るべき事也、今世の中に兵法の道たしかにわかまへたると云武士なし」と記される。「兵法」とは「武家の法」だと断定する。続いて、「先武士は文武二道といひて、二つの道を嗜む事是道也」とあり、「文武二道」と、「文」の重要性も述べている。さらに「武士は只死ぬると云道を嗜事と覚ゆるほどの儀也」とあり、「武士道とは死ぬことと見つけたり」という後の名言との関わりをうかがわせる。さらに、「武士の兵法をおこなふ道は、何事におゐても人にすぐるるところを本とし、或は一身の切合にかち、或は数人の戦に勝、主君の為、我身の為、名をあげ身をたてんと思ふ、是兵法の徳をもつてなり」と記され、「兵法」というものが「武道」とは異なり、「いくさ」をも射程にいられていることがわかる。

以下、各巻同様に、冒頭「一、」として条項(項目)が記される。ただし、本巻は、入門編または総論ともいふべき巻と考えられるので、各条項が長い。参考までに、条項の最後に、()を付し、テキストの行数を記しておく。※以下本文の行数を参考までに記しておく。行数が多ければ多いほど、武蔵の主張したい内容と見当をつけてみたい。

「二、兵法の道と云事、漢土和朝までも、此道をおこなふ者を兵法の達者といひ伝へたり」(26行)

「二、兵法の道大工にたとへたる事」(15行)

「二、兵法の道、士卒たるものは、大工にして手づから其道具をとき、(11行)

「二、此兵法の書五巻に仕立る事、五つの道をわかち、」(31行)

「二、此一流二刀と名付る事、」(24行)

「二、兵法二つの字の利を知事、」(12行)

「二、兵法に武具の利を知と云事、」(19行)

「二、兵法の拍子の事、」(14行)

地の巻は、以上八か条から構成されており、最後「右一流の兵法の道、」に始まるまとめが記される。「道をおこなふ法」として、「第一に「よこしまになき事をおもふ所、第二に道の鍛錬する所、第三に諸芸にさはる所、第四に諸職の道を知る事、第五に物毎の損得をわかまゆる事、第六に諸事目利を仕覚る事、第七に目に見えぬをさとつて知る事、第八にわづかな事にも気を付る事、第九に役にたため事をせざる事、」と九項目をあげている。さらに「鍛錬をもつて総体自由なれば、身にても人にかち、又此道に馴たる心なれば、心をもつて人に勝ち、」と、「心」の重要性も説き、最後に「又大きな兵法にしては、善人を持事にかち、人数をつかふ事にかち、身をただしくおこなふ道にかち、国を治る事にかち、民をやしなふ事にかち、世の例法をおこなひかち、いづれの道におゐても、

人にまげざる所をしりて、身をたすけ、名をたすくる所、是兵法の道也。」
とまとめる。武蔵の言う「兵法の道」は、個人のみならず、家来として
主君に仕えることから、主君として、民を治めることまでを含んでいる
ことが明らかである。

2、水の巻

水の巻は、序文が、「兵法二天一流の心、水を本として、利方の法をお
こなふによつて水の巻として、一流の太刀筋、此書に書顯すもの也、」(10
行)といふことばで始まる。「水」自体が、本巻に関わるわけではない。
「水」という名称(仏教というブランド)を借りたにすぎない。「万人と
万人との合戦の利に心得、大きに見たつる所肝要也、」とあるが、武蔵は
「合戦」を射程にいれていたのであり、本書の読者が合戦に関わることを
前提としている。つまり個人の武道という目的で書かれたのではないこ
とになる。

- 「一、兵法心持の事、」(15行)
- 「一、兵法の身なりの事、」(9行)
- 「一、兵法の目付と云事、」(6行)
- 「一、太刀の持やうの事、」(9行)
- 「一、足つかひの事、」(6行)
- 「一、五方の構の事、」(8行)

- 「一、太刀の道と云事、」(8行)
- 「一、五つのおもての次第、」(7行)
- 「一、おもての第二の次第の事、」(5行)
- 「一、おもて第三の次第の事、」(5行)
- 「一、おもて第四の次第の事、」(4行)
- 「一、おもて第五の次第の事、」(8行)
- 「一、有構無構のおしへの事、」(12行)
- 「一、敵を打に一拍子の打の事、」(5行)
- 「一、二のこそこの拍子の事、」(4行)
- 「一、無念無相の打と云事、」(4行)
- 「一、流水の打と云事、」(4行)
- 「一、縁のあたりと云事、」(4行)
- 「一、石火のあたりと云事、」(4行)
- 「一、紅葉の打と云事、」(5行)
- 「一、太刀にかはる身と云事、」(4行)
- 「一、打とあたると云事、」(5行)
- 「一、しうこうの身と云事、」(4行)
- 「一、しつかうの身と云事、」(4行)
- 「一、たけくらべと云事、」(4行)
- 「一、ねばりをかくると云事、」(5行)
- 「一、身のあたりと云事、」(5行)
- 「一、三つのうけの事、」(7行)

「一、おもてをさすと云事、」(6行)

「二、心をさすと云事、」(5行)

「一、かつと云事、」(5行)

「二、はりうけと云事、」(6行)

「一、多敵のくらしいの事、」(12行)

「二、打あいの利の事、」(3行)

「二、一つの打と云事、」(3行)

「一、直通のくらしいと云事、」(2行)

以上二十七カ条が記される。さらに巻末のまとめが「右書付る所、一流の剣術、大形此巻に記し置事也、兵法、太刀を取て人に勝所を覚ゆるは、先五つのおもてを以て五方の構をしり、太刀の道を覚へて総体自由になり、心のきき出て道の拍子をしり、おのれと立ちも手さへて、身も足も心の儘にほどけたる時に随ひ、一人にかち、二人にかち、兵法の善悪をしる程になり、此一書の内を、一ヶ条一ヶ条と稽古して、敵とたたかい、次第次第に道の利を得て、」(13行)など記されている。要するに本巻は「二天一流」の剣術、つまり基本の構にはじまる技術をまとめて述べているということになる。

3、火の巻

火の巻は、冒頭序文「二刀一流の兵法、戦の事を火に思ひとつて、戦

勝負の事を火の巻として、此巻に書顯す也、」(16行)ということばで始まる。「世間の人、毎に兵法の利をちいさく思ひなして、」とあり、さらに「(一流は)ちいさき事思ひ出ることにあらず、更に命をばかりの打あいにおいて、一人して五人十人もたたかひ、其勝道をたしかに知ること、わが道の兵法也、」と述べる。要するに、一流は戦争で役に立つ流派ということになる。

以下、条項が記される。

「一、場の次第と云事、」(13行)

「一、三つの先と云事、」(21行)

「一、枕をおさゆると言事、」(14行)

「一、とをこすと云事、」(10行)

「一、けいきを知と云事、」(8行)

「一、けんをふむと云事、」(12行)

「一、くづれを知と云事、」(9行)

「一、敵になると云事、」(8行)

「一、四手をはなすと云事、」(6行)

「一、かげをうごかすと云事、」(7行)

「一、かげをおさゆると云事、」(6行)

「一、うつらかすと云事、」(9行)

「一、むかつかすと云事、」(6行)

「一、おびやかすと云事、」(7行)

- 「一、まぶると云事、」(5行)
- 「一、かどにさわると云事、」(6行)
- 「一、うろめかすと云事、」(7行)
- 「一、三つの声と云事、」(9行)
- 「一、まざるると云事、」(8行)
- 「一、ひしぐと云事、」(8行)
- 「一、さんかいのかわりと云事、」(6行)
- 「一、そこをぬくと云事、」(7行)
- 「一、あらたになると云事、」(6行)
- 「一、そとうごしゅと云事、」(5行)
- 「一、しやうそつをしると云事、」(4行)
- 「一、つかをはなすと云事、」(3行)
- 「一、いわをのみと云事、」(2行)

以上二十七ヶ条が記され、最後にまとめとして、「右書付る所、一流剣術の場にして、不絶思ひよる事のみ云顕し置物也、」(11行)と記されている。要するに、戦いの場での、まさに実戦技術ということになる。そこで心理的な面に強くふれているところが特徴といえよう。条項のところどころに、戦争の場面での対処法が描かれ、戦争を意識していることは本巻でも変わらない。

4、風の巻

風の巻は、「兵法、他流の道を知事、他の兵法の流々を書付、風の巻として此巻に顕す所也、」(12行)ということばで始まる。つまり、一流以外の流派の批判ということになる。以下、条項が記されている。

- 「一、他流に大きな太刀を持事、」(16行)
- 「一、他流におゐて、つよみの太刀と云事、」(13行)
- 「一、他流に短き太刀を用る事、」(15行)
- 「一、他流に太刀かず多き事、」(12行)
- 「一、他(流)に太刀の構を用る事、」(16行)
- 「一、他流に目付と云事、」(15行)
- 「一、他流に足つかひ有事、」(16行)
- 「一、他の兵法にはやきを用る事、」(17行)
- 「一、他流に奥表と云事、」(13行)

以上九カ条が記され、最後に、まとめとして「右他流の兵法を九カ条として、」(9行)が存在する。他流を九派に分類し、それらを分析、批評している。基本的には、一流との比較で、一流が優れていることを知らしめる巻である。

5、空の巻

「二刀一流の兵法の道、空の巻きとして書頭す事、空と云心は、物毎のなき所、しれざる事を空と見たつる也、」(15行)ということばで始まり、具体的な条項は存在しない。最後に、「直なる所を本とし、実の心を道として、兵法を広くおこなひ、ただしく明らかに、大きな所をおもひつて、空を道とし、道を空と見る所也、空有善無悪、智は有也、利は有也、道は有なり、心は空也、」と述べてい部分が、武蔵のたどりついた境地というものであろう。

三、おわりに

本稿は『五輪書』の全体の構成を見るのが目的である。すでにその目的は達成されたのであるが、現段階での、結論めいたことを述べて、本書のまとめとしたい。

『五輪書』は、仏教の「五輪」を題名にとったのであるが、それは仏道精神を「兵法」に活かすということでも何でもなく、悪く言えば、仏道という権威(ブランド)を借りて本書にはくをつけただけということになる。

また、他の思想を背景に強く持っているというわけでもない。要するに、権威ある人に差し出すために彼自身の経験から得られた「兵法」を、わかりやすく順を追って、解説したというだけのことになる。精神の

重要性も説いてはいるが、あくまでも表面的であり、思想に結びつくようなものではないと、考えられる。

よい例が、最終巻の「空の巻」である。彼の「兵法」はあくまで技術が中心であり、精神に深く及んではないことが、「空の巻」の分量の短さと、表面的な表現に終始していることから明らかといえよう。